

# やまたらけ

YAMADARAKE

早川町応援団獲得マガジン

October  
2023  
No.101

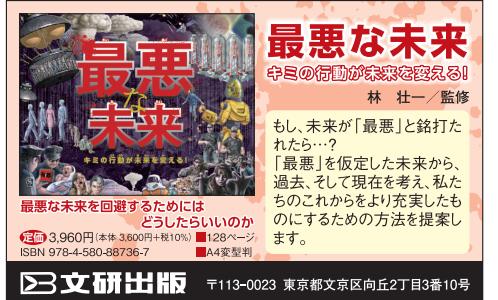


山は開かれていた  
わかってきたこと  
古文書を読み解いて



旧家に伝えられてきた古い歴史資料を調査する中央大学山村研究会のメンバー

上流研の取り組みを応援頂いています！



文研出版 T113-0023 東京都文京区向丘2丁目3番10号

地域発展のお手伝い！地域の暮らしを守る！  
**那 早邦建設株式会社**

早川町役場新庁舎  
【本社】〒409-2732 山梨県南巨摩郡早川町高住 645-27  
TEL.0556-45-3000 FAX.0556-45-2288  
[生コンクリート工場] TEL.0556-45-2700  
<http://www.soho3000.com/>

毎分 1,630ℓ 湯温 52℃の湯元自噴温泉では日本随一を誇る新湯湯出全てのお風呂、客室風呂、給湯、シャワーに至るまで源泉掛け流し  
**全館源泉掛け流しの宿 西山温泉 慶雲館**  
〒409-2702 山梨県南巨摩郡早川町西山温泉  
TEL.0556-48-2111 FAX.0556-48-2611 <http://www.keiunkan.co.jp>

早川町で感動体験を…  
南アルプス生態邑  
光源の里温泉 ヘルシー美里  
南アルプス邑野鳥公園  
ご予約・お問い合わせ  
TEL/0556-48-2621  
<http://www.hayakawa-eco.com/hmisato/>

生命保険、損害保険のことなら  
**株式会社 さいとうエージェンシー**  
tel.055-280-3360 fax.055-280-3361  
自動車販売、オートリース、レンタカーのことなら  
**有限会社 S・T・E・P**  
tel.055-280-3350  
  
〒400-0422 山梨県南アルプス市荊沢 1356-1

やまづらけ 早川町特産品  
早川町観光PR  
早川町の魅力を東京で発信します!  
～お気軽にお問い合わせください。～  
ANNIVERSARY CONCIERGE  
アーバーサリーコンシェルジュ  
TEL : 03-5823-4043

南アルプス街道の交通安全と  
清流早川の自然を守ることを永遠のテーマに  
地域社会の発展に貢献することを目指します。  
**早川砂利協同組合**  
山梨県南巨摩郡早川町小綱 26  
電話 0556-45-2450

## 広告主募集

上流研では、本スペースまたは裏表紙に広告主を募集しています。

やまたらけ発行	広告料金	大きさ	データ形式
年4回(予定)	年間22,000円 (出版社さま年間33,000円)	幅63mm、高さ41mm	aiデータ(アウトラインしたもの) またはpdfデータ

ご関心のある方は下記問い合わせ先(NPO法人日本上流文化圏研究所)までお気軽にご連絡ください  
電話:0556-45-2160 Eメール:[info@joryuken.net](mailto:info@joryuken.net)



編集後記 30年にわたる地道な調査と研究で、江戸時代の早川の人々の暮らしぶりを明らかにしてくれた、中央大学山村研究会の皆さん。「古文書」というと、とっつきにくく価値もわかりづらいですが、ご先祖様たちの知恵や苦労を伝えてくれる貴重な記録です。歴史の中の「山の暮らし」は、未来にもつながるものだと思いました。

発行元 / NPO法人日本上流研究所  
住所 / 山梨県南巨摩郡早川町葉袋430  
Tel.0556-45-2160 Fax.0556-45-2268  
[www.joryuken.net](http://www.joryuken.net)

—古文書を読み解いてわかつてきしたこと—

文・写真 白水智

# 山は開かれていた



中央大学山村研究会の古文書調査の様子。



①



箱に入っている古文書。  
旧家の木箱や筆筒の引き出しなどから  
は、江戸時代以前から昭和のものまで、当  
時を語るさまざまな古文書が出てくる。

○)にかけて人口は五・八%減っている。ところが、同じ天保期、早川流域(江戸時代には「早川入」と称していた)ではほとんどの死者が出ておらず、人口には大きな変化はない。それは恐らく絹織物生産で生計立て、米穀を購入して生活している。しかし、天保飢饉に際して、河内領内(嶺南地域)では、幕府からの支出なしに領内の富裕者に上納金を差し出させる方法で救済措置を実施し、飢えて命の危機に陥る者などもなく凌ぐことができたという。これも山の豊かさを背景にした富裕者がいたからこそ実現できたことである。

木材に関する限り、良材に恵まれた早川入には、林業の現地元締めとなる有力者がおり、熱心に幕府への売り込みを展開していた。天保一五年(一八四四)や安政六年(一八五九)の江戸

月現在で九八七人。日本一人口の少ない「町」となっている。「山ばかりで生活も不便だから、過疎地になっている」。おそらく多くの人がそう捉えているだろう。だが、移動も通信もあるかに不便だったはずの江戸は今の4倍もあった。ここで大切なのは、当時の日本の人口が現在の4分の1だったことである。日本に現在の4分の1しか人がいない時代に、早川には4倍の人々ーしかも幼児から年寄りまでーが暮らしていたのであ

る。山間地は決して住みづらい不毛の地ではなかった。それどころか、多くの仕事があり、活動に満ちた社会だったのである。今回の『やまだらけ』では、古文書などからわかつてきた山村の開かれた姿について紹介していきたい。

## 手がかりは古文書

この地の江戸時代のことを知るには、手がかりとなる史料(文字で書かれた歴史探究の素材)が必要である。とくに紙に書き残されたいわゆる「古文

書」は貴重な手がかりとなる。

私も一員である中央大学山村研究会は、1991年以来30年以上にわたって早川町に残る貴重な古文書を継続的に調査してきた。近年は林学・地形学・地震学などの理系の研究者も加わって、山村の姿をより多くの面から明らかにできるようにもなってきた。そして東日本大震災以降、とくに注目してきたのが、飢饉や自然災害などを早川の人々がいかに乗り切ってきた。そして東日本大震災以来、甲斐国は何度も飢饉に見舞われている。とくに郡内騒動のきっかけともなった天保の飢饉は苛烈を極めた。郡内(都留郡)地域では、天保七年(一八三六年)にかけての約半年で人口の九パーセントが死失する惨状を呈し、多数の人々が飢えによって命を落とす。甲斐国全体でも天保五年(一八三四年)から見えるて、山村のもつ強靭な生命力があつた。

力であった。

## 飢饉に強かつた早川入

江戸時代、甲斐国は何度も飢饉に見舞われている。とくに郡内騒動のきっかけともなった天保の飢饉は苛烈を極めた。郡内(都留郡)地域では、天保七年(一八三六年)にかけての約半年で人口の九パーセントが死失する惨状を呈し、多数の人々が飢えによって命を落とす。甲斐国全体でも天保五年(一八三四年)から見えるて、山村のもつ強靭な生命力があつた。



古文書からも栽培していたことがわかるアワ(写真左)とキビ(写真右)。早川町内で近年も栽培が続けられている。

## 大物の林業家がいた

木材に関する限り、良材に恵まれた早川入には、林業の現地元締めとなる有力者がおり、熱心に幕府への売り込みを展開していた。天保一五年(一八四四)や安政六年(一八五九)の江戸

②

城火災後の修築などに際して、かなり積極的な売り込みを展開した記録が残っている。こうした公的大規模事業への参入には、巨額の保証金を要求されることもあったが、早川入の元締めたちは、江戸や各地の豪商・材木問屋などと組んで資金を調達したり、江戸まで出張して幕府の担当役人との直接交渉に当たるなど、早川を飛び出して縦横無尽に活動していたことがわかる。また、早川入には杣（伐採）・日雇（運材）などの専門技術をもった職人が多くいて、それら林業職人は早川内だけにとどまらず、現在の長野県や栃木県など各地の林業現場にも向いており、各地から来る職人たちと交流をもっていたと思われる。外の広い世界を知っているのである。

## 巧みな交渉術

きた武士たちに目を見張らせるような教養溢れる歌詠みの腕を見せ、次第に岡藩士たちと心の交流までも実らせていく様が窺える。初めは甲斐の山里の工事に動員されて投げやりだつた武士

決して井戸の中の蛙ではないかった早川入の人々の有能さは、

たのも、工期が進むにつれて、この交流を経て心を開くようになり、最後は御普請終了後も江戸に帰つた武士たちから滞在中の心遣いへの礼状をもらうような間柄になつていく。

支配する領主との熾烈な交渉事でも見て取ることができる。急流の早川は気象・地形条件から年間の降水量も多く、しばしば大雨で増水した。耕地などに被害が及びそうになると、村人たちも京ヶ島村には、工事の資材調達から施工まで可能な熟練の技術者・労働力が揃つており、領主側を凌ぐ治水の知識や経験をもとに、申請した工事の大半を認めさせている。場合によつては平時の行政を担当する代官所以外に、治水を専門に取り扱う役人（御普請奉行）とも直接



江戸時代の古文書に書かれている災害の現場を見学する中央大学山村研究会のメンバー。調査では、古文書に登場する場所を実際に見学することも重視している。

交渉をし、またそれらが行われれば、かかつた経費が村に支給されることになり、村は潤う。しかも、古文書を丹念に見ていくと、どうやら実際に耕地や宅地に被害が及んだケースは少ないよう

うやら実際に耕地や宅地に被害が及んだケースは少ないよう

で、「このままでは年貢を支払うための大切な耕地が被害に遭ってしまう」という論理で治水工事を認めさせ、被害は受けずに資材費や労賃を受け取ることに成功しているよう

ある。こうした巧みな交渉ができるのも、幕府の支配機構や

その論理を知り尽くしているからである。

## 他国の武士を唸らせる教養人

また、文化的にも早川入には優れた教養を身につけていた人物がいた。一八世紀の半ば、豊後国（大分県）岡藩の武士たちが早川入に「お手伝い普請」（幕府の命令で工事の支援に來ること）でやってきたことが

あった。武士たちは京ヶ島村の名主宅でしばしば狂歌の会を催した。そのやり取りを見ると、名主善左衛門が遠方からやって

くることに成功しているようである。こうした巧みな交渉が行われば、かかつた経費が村に支給されることになり、村は潤う。しかも、古文書を丹念に見ていくと、どうやら実際に耕地や宅地に被害が及んだケースは少ないようで、「このままでは年貢を支払うための大切な耕地が被害に遭ってしまう」という論理で治水工事を認めさせ、被害は受けずに資材費や労賃を受け取ることに成功しているようである。こうした巧みな交渉ができるのも、幕府の支配機構やその論理を知り尽くしているからである。



お手伝い普請には、江戸に駐在していた武士だけでなく、岡藩の地元である現在の大分県竹田市から来ている武士もいた。

## 活気に満ちた強靭な山村

こうしたさまざまな事例を見てくると、いかに早川入が活気に満ちた、開かれた社会だったかを実感する。それは、この地が広大な土地と森林資源・動物資源に溢れた山の豊かさに支えられてきたからである。そして、その資源の豊かさは現在も変わることがない。さらに重要なことは、早川の人々がその資源を活かしきる知恵や技術をもつていたことである。しかも、平野部ではもはや失われてしまつた身の周りの自然を活かしている。現代は、社会の変化が一時的に山の資源を無用なものとしているだけである。気候変動や自然災害に際して、再び山に生きる知恵や技術、そして山の資源が必要とされる時期が来るであろう。そのときに、過去の早川の人々が残したさまざまな痕跡は再び光を浴びるに違いない。

なお、ここに述べてきたことをもっと知りたい方は、中央大学山村研究会編『山村は災害をどう乗り越えてきたか』（小字社・二〇二三年二月刊）に詳しく取り上げられているのでご参照いただければ幸いである。

**BOOK INFORMATION**

**山村は災害をどう乗り越えてきたか**

こちらの書籍は、書店で購入できるほか、上流圏ライブラリーや山梨県立図書館でも借りられます！